



慶應義塾大学ビジネス・スクール

耳から脳が溶け出していると訴える公務員

主訴：仕事をしていると、脳が溶け始め、溶けた脳みそが耳からあふれ出して止まらない感覚に襲われる。職場を離れるとき少し良くなるが、職場や仕事のことを考えるとまた脳が溶け出す感覚になる。「こんな話をしても、脳みそが耳から垂れている。先生、私の耳から緑色の脳みそが垂れているのが見えませんか」と、しきりに耳を拭く。

10

現在の仕事：38歳の女性で独身。さる県の「行政モニター」に関する職場の主任（係長待遇）。職場は、市民の声を行政に反映させる窓口の役割を果たしている。仕事自体は県庁に入ったとき以来したかった仕事であるので、単調な側面はあるものの意義を感じて面白い。

15

仕事の内容は、県民から直接寄せられる県行政に対する意見や要望（主に手紙で寄せられる）をまとめて関係部局に知らせたり、知事や議会関係者に提出したりする。また、予めお願いしてある「県政モニター」からの意見をまとめたり、独自に県行政に対するアンケート調査を行ってその報告書を書く仕事である。

20

これまでのキャリア：父親は公務員、母親は専業主婦の家庭の長女（ひとり娘）として育つ。地元の公立の中学校、高校を出て、地元の国立大学の法学部へ。中学、高校時代は、「賢い子」「素直な子」「しっかりした子」として近所でも評判の優秀児で通した。

25

学生時代は司法試験を目指していたが、4年生の時、「力試しで」国家公務員の上級職と県庁の職員を受験したらどちらも「合格してしまった」。中央官庁で働くことも考えたが、地元に残って欲しいという両親の希望もあって、県庁に勤めることになった。県庁に勤務し、半年前から現在の職場に勤務している。

学生時代には、行政や企業の不祥事が大きな問題となり、いつも義憤を感じていた。弁護士か検事になって世の中の不正を正す仕事に就きたいといつも思っていた。クラブは、グッドサマリタン・クラブに所属し、日本にやってきている外国人のお世話をボランティア

30

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。

で行っていた。東南アジアからの留学生や労働者の生活上の世話をし、人のために働くことの素晴らしさを実感したという。

県庁に入った理由は、「腐敗した行政、弱者に冷たい行政を正して、県民の幸福に結びついた行政にしたい」と願ってのことであった。初めて就いた仕事は、公害行政の仕事。就いた頃には既に公害問題はほぼ解決していて、部署を小さくする後始末のような仕事を7年間行った。次は徴税関係の仕事。税務署勤務を8年。どちらもしたい仕事ではなく、もっと県民の声を行政に反映させられるような仕事がしたいと思っていたので、異動の希望調査にはいつも「行政モニター」関係の職場を書いていた。そして、半年前に長年の念願かなって現職場に異動した。その時初めて役職（主任）がついた。

26歳の時、大学時代から知り合いのクラブの先輩と親しい関係になり、28歳で結婚を申し込みされた。相手は大手都市銀行に勤める銀行員。全国の支店を渡り歩いてキャリアを形成してゆく関係上、結婚を機に県庁を辞めてついて来て欲しいと言われた。「気も狂わんばかりに悩んだ末に」、若いときに立てた「県民のための行政官になる」という自分のキャリアを追求したいという思いと、両親のことが心配で申し出を断った。

職場の状況：職場は54歳の課長（男性）、本人（主任）、32歳の職員（女性、既婚、3人の子どもがいる）が正規職員で働いているほか、常勤的非常勤（アルバイト）の女性が3人の計6人の構成である。

課長は高校卒業後県庁に入り、ずっと県立高校の事務畠で働いてきた後、現職へ。おとなしい性格で、「ボーっとしていて、あまりしゃべらない。はんこだけ押している人」という。32歳の正規職員は、共働きで4歳、2歳、1歳の3人の子どもを育てていて、育児に忙しく、「仕事のことは頭にない」感じ。子どもが熱を出したわ、保育園に急に迎えに行かなければならないわ、といった事情で仕事にお構いなく半日休暇を突然取って帰ってしまう。

3人の常勤的非常勤の人は、週に3日から4日手伝いに来てくれる。2人は49歳、48歳の家庭の「奥様」。子育てが終わり、ご主人も地元の大手企業の取締役で、「暇だから、県庁で働いていると言うと優雅に見えるから、来ている人たち」。もう1人の人は37歳、独身の女性。親戚筋に県の有力者が多く、ずっと「コネで」県庁の非常勤をしてきた人。マンションや土地などを貸しているので、生活やお金には困っていない。

職場には、この6人が作業する大きな机と、それぞれの机が6つある。部署は県庁本庁者の一部屋を使っている。他の職員と接触することはほとんどなく、この6人が1部屋で仕事をしている。

職場でのありさま：女性職員同士おしゃべりをしながら作業をしている。話題は、「子育てのこと」「料理やファッションのこと」「趣味のこと」「その日の新聞の三面記事のこと」などが多い。CLはおしゃべりをしながら仕事をするということに、抵抗感があり、何度か

5

10

15

20

25

30

35

「おしゃべりを止めよう」と提案したが、職場がシーンとして居づらい雰囲気になって、またおしゃべりが始まってしまう。そんな話を聴いていると、「こんなレベルの低い会話に私はついていけない。もっと大事な話し合うべきことがあるはずだ」と思って、県民やモニターから意見について議論するように差し向けるが、誰もあまり反応しない。すぐに、「愚にもつかないような、低レベルな話」に戻ってしまう。

5

37歳の女性は趣味で漫画を描いている。家や休み時間に描いた漫画を持ってきては、他の職員に見せている。「奥様」は絵にいつも感心して彼女の才能をたたえる。そうされると彼女は嬉しくなってますます絵を持ってくる。漫画の話、ことに「宇宙戦艦ヤマト」の話になると彼女はその博識振りを披露して、恍惚となるまでそのストーリーを話す。CLを除く回りの女性たちは、「すごいわね。よく知っているわ。私たちはベルバラの世代だったけど、云々」 10 と止めどもなく話題が広がってゆく。37歳の彼女は恍惚状態に陥ると、「私、これから漫画会のスターになるかもしれないわ。○○県の行政モニター室から新星あらわるというふうに言われて、才能が認められて、皆さん漫画会のスターを知っているということでサインをもらってきてと頼まれたりして…」と、空想の世界に入ってゆく。「奥様」は、「がんばってね。あなたならきっとできるわ。人間何事も努力よね。私の息子なんかとても 15 入れないと思っていた会社に努力で入れたし…」と、応援する。

こんな会話を聞いていると、CLは自分がを目指していた公務員の使命というものがだんだん歪められてゆく感じがする。県民のための行政の場、しかも行政モニターの部署でこんな会話がなされていると思うと、一生懸命働いて税金を納めている県民に申し訳ないと思う。そして、頭が混乱てきて、脳が溶け出し、耳から流れ出している感覚に襲われるという。 20

不許複製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

Contents Works Inc.